

中西 弘樹¹・久保田 信²・松本 敏郎³・伊藤 正一⁴：

ワニグチモダマ *Mucuna gigantea* (Willd.) DC. (マメ科) の種子の日本本土への漂着

Hiroki NAKANISHI¹, Shin KUBOTA², Toshiro MATSUMOTO³ and Shoichi ITO⁴: Seeds of *Mucuna gigantea* (Willd.) DC. (Leguminosae) drifted ashore in Japanese mainland

ワニグチモダマ *Mucuna gigantea* (Willd.) DC. はマメ科の常緑のつる性木本植物で、その分布は一般に東南アジアを中心に西はインド、東は南太平洋、南はオーストラリア北部、北は八重山諸島までの範囲と考えられているが(大橋 1989)、インド洋やアフリカに産するものも同種と考えられ、それらは subsp. *quadrialata* (Baker) Verdcourt と区別されている (Smith 1985)。したがって、東南アジアや南太平洋のものは subsp. *gigantea* となる。日本列島におけるその種子の漂着は、自生地八重山諸島では知られていたが (Nakanishi 1983)、それ以外ではほとんど知られていなかったため、ここに記載しておく。筆者らの調査でこれまで、高知県四万十市平野で 5 個 (松本)、和歌山県西牟婁郡白浜町北浜で 1 個 (久保田)、新潟県佐渡市岩谷口で 1 個 (中西・伊藤 2006) 鹿児島県熊毛郡屋久町安房で 2 個 (中西 1992) を発見することができた (図 1)。この漂着分布パターンは、モダマ類や他の南方系種子と同じであろうと思われる。すなわち太平洋側では関東地方南部まで、日本海側では能登半島、佐渡島あるいはさらに北まで漂着している可能性がある。今後、九州北部から能登半島、東海から関東地方南部での発見が期待される。

採集した漂着種子の大きさは、縦 22.7~24.0mm、横 24.8~27.4mm、厚さ 9.8~12.9mm で、偏円形をしており、臍の幅 1.4~1.9mm で、外周の約 5 分の 4 以上を占める (図 2)。それぞれの測定値の平均と標準偏差を、これまで採集した八重山諸島のものと表 1 に示した。マン・ホイットニーの U 検定の結果、両群の間にいずれの形質も有意差はなかった。色は朽ち葉色、茶色、焦茶色、濃赤茶色、黒色に近いものなど様々であり、まだら模様があるものなど変異が大きい。同属の他の種子と比べて、本種は臍の幅が細く、しばしばやや溝状にへこむ傾向がある。漂着種子の外見はいずれも生きた状態であり、長期間生きたまま海水に浮かび、海流散布によって広がるものと考えられる。

日本本土におけるトビカズラ (*Mucuna*) 属植物の種子は、これまでイルカンド (ウジルカンド、クズモダマ) (久保田ほか 2004) *M. macrocarpa* Wall., カシヨウクズマメ (ハネミノモダマ) *M. membranacea* Hayata, *M. urens* (L.) Medikus が知られているが (中西 1999)、それ以外の種も漂着している可能性がある。

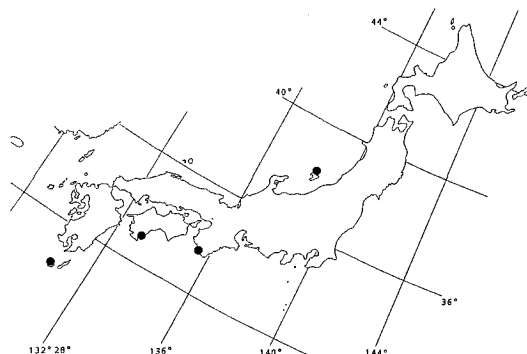


図 1. 日本本土におけるワニグチモダマの種子の漂着地点。

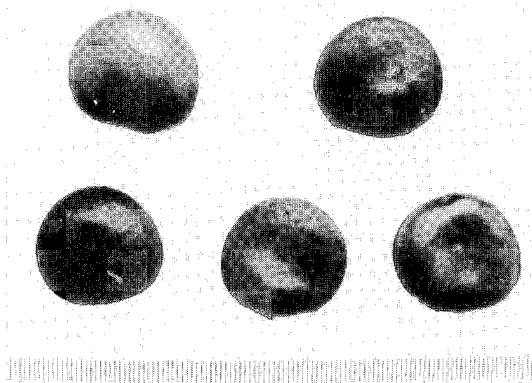


図 2. ワニグチモダマの漂着種子 (高知県採集)。

表 1. ワニグチモダマの種子の大きさ (平均±標準偏差) の比較

	本 土* (n = 8)	八重山諸島 (n = 11)	有意差
縦	23.2±0.5mm	22.8±1.6mm	n.s.
横	25.7±0.9	25.6±1.8	n.s.
厚さ	11.5±1.1	11.4±0.9	n.s.
臍幅	1.7±0.2	1.5±0.2	n.s.

*佐渡島, 屋久島を含む

引用文献

- 久保田信・永益英敏・中西弘樹. 2004. イルカンダ (マメ科) の本州への漂着初記録. 南紀生物46(1): 37-38.
- 中西弘樹. 1992. 屋久島の漂着果実と種子. 長崎女子短期大学紀要(16): 25-30.
- Nakanishi, H. 1983 Drift fruits and seeds on the coast of the Yaeyama Islands, southernmost of Japan. Jour. Phytogeog. & Taxon. 31: 22-30.
- 中西弘樹. 1999. 漂着物学入門. 211pp., 平凡社, 東京.
- 中西弘樹・伊藤正一. 2006. 佐渡ヶ島に漂着した熱帯のマメ科種子. どんぶらこ(18): 2-3.
- 大橋広好. 1989. マメ科. 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫 (編). 日本の野生植物木本II. pp.253-272. 平凡社, 東京.
- Smith, A.C. 1985 Flora Vitiensis Nova. A new Flora of Fiji. vol.3. 758pp., Pacific Tropical Botanical Garden, Lawai.

¹ 〒852-8521 長崎県長崎市文教町1-14 長崎大学教育学部生物学教室 ¹ Biological Institute, Faculty of Education, Nagasaki University, 1-14, Bunkyo-machi, Nagasaki 852-8521

² 〒649-2211 和歌山県白浜町459 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所 ² Seto Marine Biological Laboratory, Field Science Education and Research Center, Kyoto University, Shirahama, Nishimuro, Wakayama 649-2211

³ 〒789-1911 高知県幡多郡黒潮町浮鞭3573-5 NPO 砂浜美術館 ³ NPO Museum Beaches, 3573-5, Ukibuchi, Kuroshio-cho, Hata-gun, Kochi 789-1911

⁴ 〒952-1434 新潟県佐渡市沢根町153 ⁴ Sawane-machi 153, Sado City, Niigata 952-1434